

ベルトランのサラマンドル

サラマンドルは自らの焰の中で身を滅す。

バシュラール

樋口正明

サラマンドル Salamandre は古来火の中に住むと伝えられる想像上の動物であって、水の精 Ondin, Ondine, 土の精 Gnome, Gnomide, 風または空気の精 Sylphe, Sylphide と共に四大の精とされている。フランス語では本来女性名詞であるが、ドイツ語では男性名詞となる。外見は蛇、蜥蜴等の爬虫類もしくはイモリ等の両棲類に似た形で描き表わされ、火蛇とか火蜥蜴等と訳される。火炎の如き舌を吐く爬虫類や腹に炎の色を映すイモリから火の精のイメージを類推することはたやすい。それにまた古代人は揺れ動く焰の中に、くねくねのたくる暗い影を垣間見て、それらの動物の姿態を重ね合わせたのであろう。中には随分かわいらしい絵姿も見掛けるが、紋章や錬金術の幾つかの図版に描かれているサラマンドルはなかなか堂々としていて、図体の方はいざ知らず、一見したところ蛇や蜥蜴の親類と言うより、西洋のいわゆる竜の如き風貌をそなえている。

このサラマンドルはフランソワ一世の紋所に収まって、王冠の下で火炎を吐く勇姿を今も随所にとどめているし、ドイツではホフマンの「黄金宝壺」で大活躍を演じ、ゲーテの「ファウスト」の行間にも出没する。

アロイジウス・ベルトラン Aloysius Bertrand (1807—1841) の散文詩集「夜のガスパール」GASPARD DE LA NUIT の第三の巻に「サラマンドル」と題する一篇がある。

この詩集の構成は、序文において、その草稿をベルトランが夜のガスパール氏、すなわち悪魔から受け取ったとする建て前がとられ、第一の巻、フランドル派 ÉCOLE FLAMAND, 第二の巻、旧きパリ LE VIEUX PARIS, 第三の巻、夜とあやかし LA NUIT ET SES PRESTIGES, 第四の巻、年代記 LES CHRONIQUES, 第五の巻、スペインとイタリア ESPAGNE ET ITALIE, 第六の巻、拾遺 SILVES と続き、ここまでがベルトラン自身の手によって編まれた決定稿である。ベルトランの死後、詩集の出版に際し、編者によって、これに第七の巻が遺稿として付け加えられた。第一の巻から第五の巻までは、第三の巻を除いて、中世に題材をとり、第三の巻は前後の巻と調和を保つための様々な配慮⁽¹⁾によって中世的雰囲気や漂わせながら、夜の魔術とも言うべき夢と夢想を題材としている。第六の巻は第五の巻までのどの巻にも入らぬ詩が集められ、詩人が直接的に自らの感懐を歌った詩が半数を占める。第七の巻には第六の巻までのどれ

かに分類されるような詩が寄せ集められている。

「サラマンドル」は夢と夢想を織り成して独自の世界を創り出す第三の巻に収められた作品である。

サラマンドル

「クリスマス飾りに使った柵の枯葉を少しばかり暖
炉に投げ込むと、パチパチはぜて燃え上がった」

シャルル・ノディエ——トリルビイ

「蟋蟀さん、私のたぎる吐息が聞こえず、燃え立つ炎のきらめきも見えないのね、あなた、死んでしまったの」

それでも蟋蟀は、サラマンドルがどんなに情を込めて掻き口説いても、魔法にかかって眠り込んだか、それとも気紛れを起こしてふてているのか、何も答えなかった。

「三つ百合紋章で飾った鉄の背板の裏にある灰と煤の罫で夜毎に歌ってくれたあの歌をどうか聞かせて」

しかし蟋蟀はやはり何も答えなかった。サラマンドルは泣き濡れて、時に蟋蟀の声が聞こえはせぬかと耳を澄まし、時に薔薇色、青、赤、黄、白、紫と炎の色を変えながら、ぶつぶつ何か呟いていた。

「あの方は死んでしまった。死んでしまった、愛しい私の蟋蟀さんが」——炎が今や青ざめて、悲しげな暖炉の中で次第に弱まって行く間に、私は溜め息と啜り泣きの如きものを聞いた。

「あの方は死んでしまった。あの方が死んでしまったのなら、私も死のう」 葡萄の小枝は燃え尽きて、炎は自在鉤に別れを告げながら燠の上を這いまわり、サラマンドルは餓え死んだ。

LA SALAMANDRE

«Il jata dans le foyer quelques frondes de houx bénit, qui
brûlèrent en craquetant.»

Ch. Nodier. — *Trilby*.

«Grillon, mon ami, es-tu mort, que tu demeures sourd au bruit de mon sifflet, et aveugle à la lueur de l'incendie?»

Et le grillon, quelque affectueuses que fussent les paroles de la salamandre, ne

répondait point, soit qu'il dormit d'un magique sommeil, ou bien soit qu'il eût fantaisie de bouder.

«Oh! chante-moi ta chanson de chaque soir dans ta logette de cendre et de suie, derrière la plaque de fer, écussonnée de trois fleurs-de-lys héraldiques!»

Mais le grillon ne répondait point encore, et la salamandre éplorée, tantôt écoutait si ce n'était pas sa voix, tantôt bourdonnait avec la flamme aux changeantes couleurs rose, bleue, rouge, jaune, blanche et violette.

«Il est mort, il est mort, le grillon mon ami!» — Et j'entendais comme des soupirs et des sanglots, tandis que la flamme, livide maintenant, décroissait dans le foyer attristé.

«Il est mort! Et puisqu'il est mort, je veux mourir!» Les branches de sarment étaient consumées, la flamme se traîna sur la braise en jetant son adieu à la crémaillère, et la salamandre mourut d'inanition.

暖炉にくべた葡萄の小枝が燃え尽きる間に、詩人はサラマンドルの切々たる片思いの呼びかけを聞き、その終焉を見届ける。因に三つ百合はフランス王家の紋章であり、フランソワ一世の紋所には三つ百合を配した王冠とサラマンドルが組み合わされている。また百合の花とサラマンドルの組み合わせはホフマンの「黄金宝壺」にも見られる⁽²⁾。

後追い心中をするサラマンドルは哀れである。しかし少し視点を変え、サラマンドルの深情けに辟易して煙にむせながら仏頂面をしている蟋蟀、更には情炎に焼かれるか、煙に巻かれるかして頓死する蟋蟀、あるいは燃料切れで死ぬサラマンドルを想像すると、一種のおかしみを覚える。もちろん「サラマンドル」はコミカルな作品ではない。この詩におかしみを感じたりするのは燃える火から視線を外らした所為であり、炎の実感を忘れていた所為でもある。

私が子供の頃にはかまどを使っていたし、ストーブにも風呂の焚き口にも薪をくべた。それに敗戦後しばらくはしばしば停電があって、蠟燭は必需品となっていた。つまり身近に燃える裸火が幾らでもあった。それが何時の間にか便利になって、光と熱はふんだんに使えるけれど、生きた火は次第に視界から消えて行った。今日、実際目にする炎はすっかりコントロールされて青ざめたガスの火と煙草を吸うとき、瞬時燃え上がるマッチライターの火ぐらいであろう。実際に燃える炎から遠去れば、炎の形や色の変幻、火の感触、その頼もしさと恐ろしさ、夢想を掻き立てる火の神秘性等を忘れて、ともすれば火というものを観念的にとらえがちになる。

更に、これは余計な穿鑿かも知れぬが、詩人の立場に身を置くなれば、話は笑い事では済まないであろう。詩人は暖炉の前にぬくぬくと座って、安閑と夢想を楽しんでいた訳ではあるまい。時

期をエピグラフの通りにクリスマスの後と考える必要はないとしても、もはや暖炉に火を入れる季節になっていたのであろう。ヨーロッパの冬は寒い。19世紀フランスの貧しい作家達の手紙に、切実な問題として薪や暖房費の件を散見する。柳田國男の「火の昔」にはスイスの町角で街路樹の枯葉をひろい集めて燃料にする男についての目撃談がある。とりわけ都市において、薪は結構高価なものであったらしい。それにしても詩人の目の前で燃える火は実に細々としている。お勝手許が火の車であった後年のベルトラン家で薪がふんだんに焚かれたことがあったかどうか。赤々と燃える暖炉の火に対する詩人の心情については後に少し触れる。

暖炉は火の揺籃であり、墓場でもある。蟋蟀の後を追って死んで行くサラマンドルに暖炉は悲しげに哀悼の意を表した。ベルトランもまた寒々とした部屋の中で、サラマンドルの死を衷心から悼んだに違いない。

「夜のガスパール」にはサラマンドルの登場する詩がもう一篇ある。

錬金術士

我等が術を学ぶに二法あり。すなわち、もっぱら師の口伝によるか、神聖なる靈感と啓示による法、さもななくば、書物による法。これらの書物は極めて難解にして錯綜せる故、そこに脈絡と真実を見出さんには、ぜひにも聡明にして忍耐強く、勤勉かつ細心たるを要す。

ピエール・ヴィコの哲学要諦

まだ駄目だ。——三日三晩、ランプの仄かな明かりでライモンドゥス・ルルスの錬金術の書を繙いたが、験もない。

さっぱり験目だ。ただ煌めくレットルのたぎる音と、面白がって私の瞑想の邪魔をするサラマンドルの嘲笑いが聞こえるばかり。

奴は私の髭に癩癩玉をくっつけたかと思うと、弩で私のマントに火矢を射かける。

さもなければ、奴は己れの甲冑を磨いているのだが、その折、私の処方集の頁や壺のインキに炉の灰を吹きかける。

そしてレットルはますます煌めき、聖エロアに真赤に焼けたやっところで鼻を挟まれた鍛冶場の悪魔さながら悲鳴をあげる。

けれどもまだ駄目だ。もう三日三晩、ランプの仄かな明かりでライモンドゥス・ルルスの錬金

術の書を繙こう。

L'ALCHIMISTE

«Nostre art s'apprent en deux manières, c'est à savoir par enseignement d'un maistre, bouche à bouche et non autrement, ou par inspiration et révélation divines; ou bien par les livres, lesquels sont moult obscurs et embrouillez; et pour en iceux trouver accordance et vérité moult convient estre subtil, patient, studieux et vigilant.»

La Clef des secrets de philosophie de Pierre Vicot.

Rien encore! — Et vainement ai-je feuilleté pendant trois jours et trois nuits, aux blafardes lueurs de la lampe, les livres hermétiques de Raymond Lulle!

Non rien, si ce n'est avec le sifflement de la cornue étincelante, les rires moqueurs d'un salamandre qui se fait un jeu de troubler mes méditations.

Tantôt il attache un pétard à un poil de ma barbe, tantôt il me décoche de son arbalète un trait de feu dans mon manteau.

Ou bien fourbit-il son armure, c'est alors la cendre du fourneau qu'il souffle sur les pages de mon formulaire et sur l'encre de mon écritoire.

Et la cornue, toujours plus étincelante, siffle le même air que le diable, quand Saint Eloy lui tenailla le nez dans sa forge.

Mais rien encore! — Et pendant trois autres jours et trois autres nuits, je feuilletterai, aux blafardes lueurs de la lampe, les livres hermétiques de Raymond Lulle!

第一の巻に収められている詩である。ライモンドゥス・ルルス (1235—1315) はスペインの神学者、哲学者で、とりわけ錬金術士として名高い。彼は金属変成の奥義を会得し、英国王の頼みにより実際に莫大な水銀、鉛、錫を金に変えたと伝えられている。初め蹄鉄工を生業としていた聖エロアは鍛冶屋等の守護聖人である。

この詩に現われるサラマンドルは男性名詞になっているが、その理由について、フェルナン・リュードはその著書「アロイジウス・ベルトラン」の中で、火は錬金術において男性原理であるからとしている⁽³⁾。ベルトランはサラマンドルに女性と男性とでは全く違った性格を与えている。

「夜のガスパール」の第一の巻から第六の巻までに収められている散文詩は66篇、その中の実に半数以上の詩に、エピグラフも含めて、何らかの形で火が現われる。それらの火の半数以上は蠟燭、燭台、ランプ等の燈火である。題名に夜の文字を冠しているが、第三の巻を除いて、この詩集は別段夜の詩を集めている訳ではない。しかし照明の数を見て判る通り、夜の詩が多いことは事実であり、燈火は夜景を描く際の光源となる。

「サラマンドル」の他に、火を主題とした詩は第二の巻に二篇ある。第二の巻は巻頭の詩「二人のユダヤ人」Les deux juifs からキナ臭いにおいが漂い始め、二番目の詩「夜の乞食」Les gueux de nuit では焚き火を囲んで夜の闇にうごめく者達が描かれ、三番目の詩「角燈」と四番目の詩「ネールの塔」に至って火が真正面に現われる。

角 燈

仮面「暗いな、お前の燈を貸せ」

メルキュリオ「ばかな、猫の燈は両の眼だ」

カーニバルの夜

あゝ、雨樋の精たるこの俺が、今宵、嵐の雨宿りに、なんでグールグラン夫人の角燈に逃げ込んだりしたのだろう。

俄か雨でずぶ濡れの何かの精が、俺の入った入口が見付からず、この煌々と輝く館のまわりでぶんぶん唸っているの聞いて俺は笑っていた。

そいつは声をからし寒さに凍えて、道を探すために、せめて奴の糸蠟燭に俺の蠟燭の火を貸してくれと頼んだが、俺は取り合わなかった。

突如、角燈の黄色い紙が、旗指し物のように垂れ下がった通りの看板をきしませて吹き過ぎた一陣の風で破れ、めらめら燃え上がった。

「エス様、お宥しを」と信心家ぶった女が五本の指で十字を切りながら叫んだ。「悪魔の責め苦を受けるがいゝ、魔法使いめ」 蛇花火よりも激しく火を吐きかけて、俺は叫んだ。

いやはや、リュイヌ家の姫君の緋羅紗の耳覆いをした五色ひつ鷲と、今朝方には雅びと粧いを競い合っていた俺としたことが。

LE FALOT

Le Masque. «Il fait noir ; prête-moi ta lanterne.
Mercurio. — Bah ! les chats ont pour lanternes
leurs deux yeux.»

Une nuit de carnaval.

Ah ! pourquoi me suis-je, ce soir, avisé qu'il y avait place à me blottir contre l'orage, moi petit follet de gouttière, dans le falot de Mme de Gourouran !

Je riais d'entendre un esprit que trempait l'averse, bourdonner autour de la maison lumineuse, sans pouvoir trouver la porte par laquelle j'étais entré.

Vainement me suppliait-il, enrôlé et morfondu, de lui permettre au moins de rallumer son rat de cave à ma bougie pour chercher sa route.

Soudain le jaune papier de la lanterne s'enflamma, crevé d'un coup de vent dont gémissaient dans la rue les enseignes pendantes comme des bannières.

«Jésus, miséricorde ! s'écria la béguine, se signant des cinq doigts. — Le diable te tenaille, sorcière», m'écriai-je, crachant plus de feu qu'un serpenteau d'artifice.

Hélas ! moi qui, ce matin encore, rivalisais de grâces et de parure avec le chardonnet à oreillettes de drap écarlate, du damoiseil de Luynes !

詩題の Le falot を伊吹武彦氏は懸行燈と訳しておられる。これは屋号等を入れた軒燈の一種であり、その傍にいる女は遣り手ばばあめいてきて、一場の情景としてはなかなか面白い。しかしここでは第六の巻の「ルーヴルの隠し門」La porterne du Louvre 等の例にならって、普通に、夜道を照らすために持ち歩く角燈と解しておく。

雨樋の精 le follet de gouttière はスカルボ Scarbo⁽⁴⁾と同様、ベルトランの創作であると思われる。le feu follet と言えば、墓地や沼地に飛ぶ燐火、つまり鬼火や狐火のことで、雨樋の精は詩の内容から推して、鬼火の精と考えられる。大きな建物には、時に、装飾として、口から水を吐き出す仕掛けの怪獣面が雨樋の端に取りつけられている。「夜のガスパール」では、第一の巻の「石工」Le maçon に、この仕掛けがタラスク les tarasques として出てくる。タラスクは、プロヴァンス地方の伝説によると、ローヌ川沿岸を荒しまわった水陸両棲の怪獣であるが、普通には樋の水の落ち口を飾る怪獣はシメール la chimère と呼ばれる。シメールの原義はギリシャ神話のキマイラで、衆知のように、この怪獣は口から水ならぬ火を吐く。雨樋と火の関連はこれ位しか思い浮かばない。

第二詩節と第三詩節の何かの精は明かりを慕って、航跡のような白い筋を引きながら飛ぶ虫を

写している。ベルトランは虫に大変関心があったと見えて、特に第三の巻には虫が頻出する^同。なお、蛇花火はくねくねくねりながら飛び出す小さな打ち上げ花火、リュイヌ家は中世の名家、五色鶉の頬は鮮やかな緋色である。

ネールの塔

「ネールの塔には歩哨屯所があり、夜間はそこに夜警隊が詰っていた」

ブラントーム

「クラブのジャックだ」「スペードのクィーン、俺の勝ちだ」そこで敗けた兵隊上がりの荒くれが卓をどんと叩いて自分の賭け金を床にはね飛ばした。

しかしこのとき、市長のユーク殿はスープと一緒に蜘蛛を飲み込んだ乞食のようなしかめっ面をして、鉄の火消し壺に唾を吐いた。



「うえ、真夜中に豚肉屋共が皮剥ぎの湯通しでもやっているのかな」「べらぼうめ、セーヌで燃えているのは、ありゃ麦藁を積んだ舟だぞ」

火事は、初め、川霧の中をさまよう他愛のない狐火にすぎなかったが、やがて流れに大砲や夥しい鉄砲をドンパチ打ち出す大騒動になった。

数知れぬ乞食やびっこやならず者の群が砂浜に駆けつけ、渦巻く炎と煙を前にしてジグを踊っていた。

そして夜警隊がらっぱ銃をかついで出て行ったネールの塔と、王と王妃が誰にも見られず窓から一部始終を見ているルーヴルの塔が向かい合って赤々と火に映えていた。

LA TOUR DE NESLE

« Il y avait à la tour de Nesle un corps-de-garde auquel se logeoit le guet pendant la nuit. »

Brantôme.

« Valet de trèfle! — Dame de pique! je gagne! » Et le soudard qui perdait envoya d'un coup de poing sur la table son enjeu au plancher.

Mais alors messire Hugues, le prévôt, cracha dans le brasier de fer avec la grimace d'un cagou qui a avalé une araignée en mangeant sa soupe.



« Pouah! les chaircuitiers échaudent-ils leurs cochons à minuit? Ventre-dieu! c'est un bateau de feurre qui brûle en Seine! »

L'incendie, qui n'était d'abord qu'un innocent follet égaré dans les brouillards de la rivière, fut bientôt un diable à quatre tirant le canon et force arquebusades au fil de l'eau.

Une foule innombrable de turlupins, de béquillards, de gueux de nuit, accourus sur la grève, dansaient des gigues devant la spirale de flamme et de fumée.

Et rougeoyaient face à face la tour de Nesle, d'où le guet sortit, l'escopette sur l'épaule, et la tour du Louvre d'où, par une fenêtre, le roi et la reine voyaient tout sans être vus.

主題はセーヌ川の舟火事である。第二詩節の le prévôt は歴史的に様々な語義のある官職名、称号であるが、ここでは舟火事という状況にかんがみ、パリを代表する市民 Prévôt des marchands の意に解して市長と訳した。この市民は市の商業裁判権をもつと共に、セーヌ川を航行する積荷舟による商取り引きを独占する水上商人ギルドの組合長でもあった。パリ市の印章に描かれている帆掛け舟はこのギルドの名残りである。

「夜のガスパール」に頻出する多種多様な火には誰しも注目すると見えて、例えば、フェルナン・リュードは「アロイジウス・ベルトラン」において、火に関する詩の題名を列挙し、それらの詩句を極く簡単に引用している⁶⁾。参考までに、それらの詩題と火の種類を記せば、次のようになる。「石工」(戦火)、「ネールの塔」(舟火事)、第三の巻の「鐘の下の輪舞」La ronde sous la cloche (雷に撃たれて燃える魔術書)、第五の巻の「警戒」L'alerte (夕日を浴びて燃え立つ窓ガラス)、第一の巻の「サバトへの出発」Départ pour le Sabbat (燠で真っ赤な暖炉)、「二人のユダヤ人」(火の粉)、第四の巻の「グランド・コンパニー」Grandes Compagnies (篝火)、第五の巻の「仮面の歌」La chanson du masque (花火)、第七の巻の「ヴォルガスト城塞」La citadelle de Wolgast (松明)、「錬金術士」(サラマンドル)、「サラマンドル」、第六の巻の「第二の人」Le deuxième Homme (太陽)。因に、リュードは雨樋の精を一応風または空気の精として分類している。リュードが列挙しているのは、もちろん「夜のガスパール」に現われる火の一部にすぎない。

アンリ・コルバも「アロイジウス・ベルトランの固定観念と想像力」の中で、ベルトランの火について論じている⁽⁷⁾。彼はベルトランの詩の第一のテーマが破壊であるとして、それを更に二つの要素、すなわち火と戦争に分解する。そしてバシュラールの「火の精神分析⁽⁸⁾」から、「あらゆる現象の中で、(火)は善と悪という二つの相反する価値づけを受けることができる真に唯一のものである。それは天国で燃え、地獄で燃える。それは喜びであり、責苦である」という一節を引用し、夜のガスパール氏が悪魔である以上、その詩集で燃えるのは地獄の劫火であると述べている。彼はその例証として三篇の詩をとりあげる。

その第一は「石工」である。この詩の最後の詩節で、空の高みにある足場から下界を見下ろす石工の目に戦火が映る。

そして夜、大聖堂の均整のとれた本堂が腕を十字に横たえて眠りにつくと、彼は梯子の上から、地平線に、軍兵達に焼き打ちされた村を見つけた。それは彗星さながら尾を曳いて空に燃えていた。

Et le soir, quand la nef harmonieuse de la cathédrale s'endormit, couchée les bras en croix, il aperçut, de l'échelle, à l'horizon, un village incendié par des gens de guerre, qui flamboyait comme une comète dans l'azur.

「石工」は第一の巻の二番目の詩であり、この詩集の中でも屈指の名篇であるから、この印象的な光景は嫌でも人の目をひく。しかしこの場面は悲惨極まる状況を秘めながら、逆にすこぶる美しい。直喩の彗星は洋の東西を問わず、一般に災厄を予告するものとされている。再来年出現するハレー彗星の周期は75年、二周期溯れば1835年、ベルトランはこの彗星を見たに違いない。

第二は前述の「ネールの塔」であるが、この詩に描かれているのは、コルバも認めているように、戦火ではない。大砲や鉄砲は荒れ狂って爆ぜる火炎を描写するための譬えである。

第三は第四の巻の「フランドル人」Les Flamandsで、中世フランドルの商業都市、現在はベルギーのブリュージュが戦火の舞台になっている。火に関わる部分はフランス国王に反逆したブリュージュ市を攻め落とし、市庁に乗り込んだフランドル伯と許しを乞う市長や助役達の問答、およびそれに続く最後の詩節の一部である。

「殿下」

「市は焼き拂う」

「殿下」

「市民共は絞首刑だ」

火を掛けられたのは市の城郭の外一ヶ所だけ、絞首台で縊られたのは市民軍の隊長達だけ、

.....

« Monseigneur !

— Ville brûlée !

— Monseigneur !

— Bourgeois pendus ! »

On ne bouta le feu qu'à un faubourg de la ville, on ne pendit aux gibets que les capitaines de la milice,

ブリュージュは10万エキュの金貨を支拂って戦火と殺戮を免れたのであり、詩中に燃える火の描写はない。

コルバが破壊の要素として火を殊更戦争に結びつけたのは、その次に、ベルトランはジェラルド・ド・ネルヴァルのように首吊り自殺の誘惑を感じていたのではないかとリュードが疑問を提するほど⁹⁾、これもまた「夜のガスパール」に頻出する縊死の主題へ、そして最終的には、ベルトランに始終つきまとっていた死に対する固定観念の主題へと論旨を展開するためであるように思われる。巨視的に見れば、「夜のガスパール」のもっとも重要な主題が死であることは論を俟たない。確かにベルトランの火は死と密接な関わりがある。コルバも破壊の要素としての火と戦争の結びつきだけではベルトランの火を説明するには不十分であることを承知して、別系統の火として炉床に燃える火をとりあげ、炉床の火は死を予測させると述べて、「サラマンドル」の第五詩節の一部と最後の詩節を引用している。

「夜のガスパール」の中で燃える火には幾つかの際立った特徴が見られる。その一つは異常な火、または異常な状況のもとで燃える火で、「石工」や「ネールの塔」の荒ぶる火、コルバに従えば、破壊につながる火と、「角燈」の鬼火、「サバトへの出発」の魔女の暖炉、「鐘の下の輪舞」の雷に撃たれて燃える魔術書、第三の巻の「サバトの時刻」 L'heure du Sabbat の魔法の手その他の禍々しい火をその例として挙げることができる。これは原則として中世を題材とするこの詩集にベルトランのゴシック趣味が横溢しているからであり、また彼のサタニズムの傾向を如実に示すものでもある。

更に注目すべき特徴として、消える火もしくは消えることを予測させる火を指摘することができる。消える火の典型は「サラマンドル」に見られるが、その他に幾つも例がある。

暖炉の灰の中で燃え残りが最後にはじけて消えると、蟋蟀も眠ってしまった。

Et le grillon s'était endormi, dès que la dernière bluette avait éteint sa dernière lueur dans la cendre de la cheminée.

第三の巻の「月影」Le clair de lune の一節である。また同じ巻の「夢」Un rêve の最後の詩節には次のような光景が描かれている。

だが私はと言えば、刑吏の鉄棒は第一撃でガラスのように碎け、黒衣贖罪会士達の松明は篠突く雨に消え、……

Mais moi, la barre du bourreau s'était, au premier coup, brisée comme un verre, les torches des pénitents noirs s'étaient éteintes sous des torrents de pluie,……

消えることを予測される火の一つは落日である。前述の「警戒」の他に、例えば、第三の巻の「スカルボ」や第七の巻の「絞首台」Le gibet に沈む太陽が出てくる。もっと注目に値するのは勢いよく燃えながらも、対立物である水と組み合わせられている火で、「夢」の場合は雨によって消えてしまうが、そこまで行かなくても、やがて消えることを暗示する火である。

「ネールの塔」の舟火事は川面を赤々と染めて燃えている。しかし水の上の火はすぐ消える運命にある。「鐘の下の輪舞」の節四詩節と第五詩節には次のような光景が描かれている。

だが、突如、聖ヨハネ教会のてっぺんで雷鳴が轟き、魔法使いは雷に撃たれて消え失せた。そして彼等の魔術書が彼方の真っ暗な鐘楼で松明のように燃え上がるのが見えた。

その恐ろしい薄明かりがゴシック教会の壁を煉獄と地獄の赤い炎で彩り、近隣の家々に聖ヨハネの巨大な影を投げ掛けていた。

Mais soudain gronda la foudre au haut de Saint-Jean. Les enchanteurs s'évanouirent frappés à mort, et je vis de loin leurs livres de magie brûler comme une torche dans le noir clocher.

Cette effrayante lueur peignait des rouges flammes du purgatoire et de l'enfer les murailles de la gothique église, et prolongeait sur les maisons voisines l'ombre de la statue gigantesque de saint Jean.

この恐ろしい火も雨の中で燃えているのである。「角燈」では雨樋の精が雨宿りをするという逆説的な設定になっていて、これが火を吐くのも雨の中である。消えることを予測させないまでも、火と水の組み合わせは「ルーヴルの隠し門」のセーヌ川に浮かぶ舟で揺れる角燈、第七の巻

の「水上の夕べ」*Le soir sur l'eau* の運河とゴンドラの上のカンテラ、以下同じ巻の「雨」*La pluie* における雨中の鬼婆の灯し火、「戦い果てし夜」*La nuit d'après une bataille* の満々と水を湛えた堀の縁で焚かれる篝火と雨中の天幕でともるランプ、「ヴォルガスト城塞」の水面を照らす松明等随所に見られる。

執拗に現われる水と火の結びついたイメージは意図的なものであろうか。「サラマンドル」は第三の巻の十番目の詩であるが、その直前の九番目には「オンディーヌ」が配され、水と火が対峙している。因に水の精の宮殿は湖底の火と土と空気がつくる三角形の中に建っている。この例や、キマイラ（火）—雨水の吐き出し口（水）—雨樋の精（火）—雨（水）というような着想は明らかに意図的である。しかし夥しい火と水の結びついたイメージが、すべて意識的に組み合わせられたとは考えられない。

ベルトランには一種のバランス感覚の如きものがあつたように思われる。「夜のガスパール」には中世の悲惨な、あるいはおどろおどろしい詩ばかりが収められている訳ではない。ところどころに必ずユーモラスな詩が交えてある。また「サラマンドル」と「錬金術士」に見られるように、二通りのサラマンドルに相反する性格を与え、「オンディーヌ」の神秘的な水の精に対して、第六の巻の「ジャン・デ・ティエヌ」*Gean des Tilles* に河太郎がたろうのようないたずら者の水の精を配し、第三の巻の「ゴシック風の部屋」*La chambre gothique* の薄気味悪い地の精に対して、同じ巻の「気違い」*Le fou* にコミカルな地の精を登場させてバランスをとっている。これについてはこれ以上触れないが、他に幾らも例証がある。

しかし火と水の結びついたイメージは単にこのようなバランス感覚で片付けることはできない。かと言って、バシュラールの「火の精神分析」におけるホフマン・コンプレックス、あるいは「水と夢^叫」における水と火の創造的結合にも当てはまらない。ベルトランの場合は単純に火と水が対立した形で現われ、幾つかの詩ではせめぎ合い、火は水に抗って一頻り激しく燃える。ベルトランの想像の中で火が燃えるとき、それを消そうとするかのように、ともすれば水のイメージがつきまとうようである。

第三の巻には先に述べたように詩人自身の体験と言うべき夢と幻を素材にした詩が集められているが、この巻の11篇の詩のうち、5篇に消える火または消えることを予測させる火が描かれている。このようなイメージはベルトランの無意識の中に深く根ざしていたと思われる。

精神分析をもち出すまでもなく、一般に火は性や生命を表わす言葉として用いられる。バシュラールは蠟燭の炎の前で夢想する人について、「彼は生について考え、死について考える。——中略——生と死がここでは申し分なく並び立ち、そのイメージにおいて、生と死はたがいに恰好の反対物である。単なる論理のしらべで存在と無の弁証法を処理している哲学者たちの思索の遊戯が、生まれて死ぬ光の前では劇的なまでに具体的なものとなる^叫」と述べている。

「サラマンドル」において、ベルトランが細々と燃えて消える暖炉の火を見ていたとき、火と

生命のイメージは重なっていた。火が消えることはサラマンドルが死ぬことである。このようなイメージの重なり合いは「サラマンドル」と第七の巻の「モンバゾン夫人」を比較した場合にも明らかになる。

モンバゾン夫人

「モンバゾン夫人は前世紀に片恋の騎士ラ・リュールに恋い焦がれて、文字通り焦がれ死にした絶世の美女である」

サン・シモンの回想録

侍女がテーブルに花瓶と燭台を並べると、灯影が病む女の枕^{ひと}辺の青い絹のカーテンに赤と黄色の波を映した。

「マリエット、あの方はいらっしゃるかしら」「まあ、お眠りなさいませ、少しお眠りなさいませぬと、奥様」「え、すぐに眠って、いつまでもあの方への思いにひたりますわ」

誰か階段をのぼって来る足音が聞こえた。「あ、あの方でありますように」瀕死^{ひと}の女はすでに黄泉路^{かぜ}の翳を唇に漂わせ、微笑みながら呟いた。

それは王妃のお使いとして公爵夫人の許へジャムとビスケットと薬酒を銀盆に載せて届けに来た小姓であった。

「あ、あの方はおいでにならない」と絶え入るような声で彼女は言った。「あの方はおいでにならない。マリエット、その花を一本とってちょうだい、あの方を偲んで花の香をかぎ、接吻^{くちづけ}しますから」

そう言ってモンバゾン夫人は目を閉じ、動かなくなった。彼女はヒヤシンスの香りにつつまれて息を引き取った。焦がれ死んだのであった。

MADAME DE MONTBAZON

« Mme de Montbazon était une fort belle créature qui mourut d'amour, cela pris à la lettre, l'autre siècle, pour le chevalier de la Rüe qui ne l'aimait point. »

Mémoires de Saint-Simon.

La suivante rangea sur la table un vase de fleurs et les flambeaux de cire, dont les reflets moiraient de rouge et de jaune les rideaux de soie bleue au chevet du lit de la malade.

« Crois-tu, Mariette, qu'il viendra? — Oh! dormez, dormez un peu, Madame! — Oui, je dormirai bientôt pour rêver à lui toute l'éternité.

On entendit quelqu'un monter l'escalier. « Ah! si c'était lui! » murmura la mourante, en souriant, le papillon des tombeaux déjà sur les lèvres.

C'était un petit page qui apportait de la part de la reine, à Mme la duchesse, des confitures, des biscuits et des élixirs sur un plateau d'argent.

« Ah! il ne vient pas, dit-elle d'une voix défaillante, il ne viendra pas! Mariette, donne-moi une de ces fleurs que je la respire et la baise, pour l'amour de lui! »

Alors Mme de Montbazon, fermant les yeux, demeura immobile. Elle était morte d'amour, rendant son âme dans le parfum d'une jacinthe.

サラマンドルは暖炉の火が、モンバゾン夫人は生命の火が燃え尽きて死ぬ。いずれも、つれない恋人に恋い焦がれて死ぬことには変わりはない。これらは同じ根から生まれた同工異曲の作品で、「モンバゾン夫人」は「サラマンドル」の妹であると言える。これらの作品を重ね合わせると、無意識のうちに水を呼び、ともすれば消えようとする火が、ここでは明白に消える火、すなわち死として意識されていることが判る。

翻って考えると、「夜のガスパール」の中に、異常ではなく、消えもせず、心地よく燃える火がなくもない。その火は第六の巻の「わが茅屋」 Ma chaumière で燃えている。しかしそれは極めて暗示的な意味合いをもつ。

夕べには、杜松ねずの小粗朶が赤々と香りも高く燃え上がるマントルピースの傍らで、年代記を繕いて、檜の仕合いを今もなお、またお祈りを今もなお、さながら続けているような騎士や修道士の絵姿を見るのはどんなに楽しかろう。

Quel plaisir, le soir, de feuilleter, sous le manteau de la cheminée flambante et parfumée d'une bourrée de genièvre, les preux et les moines des chroniques, si merveilleusement portraits qu'ils semblent, les uns jouter, les autres prier encore!

これはベルトランが家族と共に幸せな日々を送るためにアルプス山中に建てることを夢見た山小屋の情景を歌った詩の一節である。1830年のロマン派年報 *Annales romantiques* に発表された初出の異文に註を付してベルトランはこれが白昼夢であり、スペインの城にすぎないと断っている。楽しかるべき場所には心地よい火が赤々と燃えていなければならない。しかしそのよう

な火は詩人の手の届かぬ空中楼阁の中で燃えているだけである。そしてこの世にいつまでも燃え続ける火はない。

死につながる消える火は最終的に第六の巻の「第二の人」において劇的な終末を迎える。ベルトラン自身の手になる「夜のガスパール」は実質的には「第二の人」を以って終る。この後に付け加えられた一篇は序文と第一の巻の間に挿入されたヴィクトル・ユゴーに献げられた詩と対をなすサンド・ブーヴへの献呈詩である。この詩集を締めくくる詩の中で、人間は神に反逆する。この世が一巡して新たな創造が始まったとき、こんな世界には二度と生まれるまいと決意した人間は神の呼びかけを完全に黙殺して何も答えない。そのため新たな創造は始まった途端に終末を迎える。

——そして大天使のらっぱが深淵から深淵へ鳴り渡る間に、天も地も太陽も、すべてが創造の隅石たる人を欠いて、大音響と共に見る影もなく崩れ落ちた。

— Et la trompette de l'archange sonna d'abîme en abîme, tandis que tout croulait avec un fracas et une ruine immenses: le firmament, la terre et le soleil, faute de l'homme, cette pierre angulaire de la création.

ベルトランは34歳の若さで生命の火が燃え尽きる前に己の黙示録をつくった。「夜のガスパール」を締めくくる詩の結末において、火の根源たる太陽もまた、第二の人の、つまりはベルトラン自身の意志によって世界と共に崩れ落ち、永遠に消滅するのである。

詩の翻訳は「GASPARD DE LA NUIT」, 1972, Flammarion, Paris にもとづく。

- 註(1) これについては別稿に記した。「東と西の文学」第3号所載「ベルトランの夢」
- (2) 「黄金宝壺」(岩波文庫)第三及び第八夜話。他に「黄金の壺」(創土社, ホフマン全集第二巻)
- (3) Fernand Rude, 「ALOYSIUS BERTRAND」1971, Édition SEGHERS, Paris. p. 105.
- (4) 別稿。「東と西の文学」創刊号所載「スカルボ考」
- (5) 同上
- (6) Fernand Rude, 「ALOYSIUS BERTRAND」p. 105
- (7) Henri Corbat, 「HANTISE ET IMAGINATION CHEZ ALOYSIUS BERTRAND」, 1975, Librairie José Corti, Paris. p. 115~118.
- (8) Gaston Bachelard, 「La psychanalyse du feu」翻訳「火の精神分析」, 前田耕作訳, せりか書房。
- (9) Fernand Rude, 「ALOYSIUS BERTRAND」p. 98.
- (10) Gaston Bachelard, 「L'EAU ET LES RÊVES」, 翻訳「水と夢」, 小浜俊郎, 桜木泰行訳, 国文社。
- (11) Gaston Bachelard, 「LA FLAMME D'UNE CHANDELLE」, 翻訳「蠟燭の焰」, 渋谷孝輔訳, 現代思潮社。引用は p. 35.